

52 当院における外来一般撮影の患者確認にかかわる行為の検討について

春日部市立病院

○金子 初穂 矢崎 一郎 小野寺 奏
石丸 秀一 千田 久美子 工藤 年男

【目的】

当院のインシデント報告で、外来一般撮影における患者誤認のミスが、半月に1、2件出ている。

技師が撮影をするとき、間違っている行為や別の患者確認の道筋があるのか。外来一般撮影の撮影にかかわる患者確認までの行為を、階層タスク分析の手法を用いて検討する。

【方法】

フリーソフト MindMap を使用し、経験年数6～21年の技師5名で、患者・受付事務・技師の撮影にかかわる患者確認までの行為を抽出した。次に、経験年数6、21年の技師2名で、抽出した行為の階層化をし、撮影にかかわる患者確認までの行為を階層タスク分析した。

階層タスク分析とは、技師が、撮影にかかわる患者確認というゴール（目標）を達成するために、必要なタスク（技師の行為）を書き下し、この流れを分析するものである。

【結果と考察】

1) 撮影にかかわる患者確認までの行為を書き出し、行為の抽出を行った結果、行為数は患者26、受付事務68、技師101であり、技師が最も多くなった。

2) 今回の分析では「撮影室に呼び込み入室した目の前の患者が、撮影者本人であるかの確認の行為」をゴールとした。

ここで行為の書き出しの結果、技師と受付事務とでは、ゴールが異なっていたことが分かった。技師のゴールが「オーダー＝目の前にいる今から撮影する患者」であることに対し、受付事務のゴールは「必要書類の確認と、その書類を撮影室前のテーブルに並べて置く」ことであった。患者にとって、撮影にかかわる患者確認をされるのは、

技師だけであると分かった。

3) 2) の結果を受けて、技師の行為の階層タスク分析のみ行った。今回の分析は、目的のゴールにたどり着けなくなった場合に、その対処をクリアした上で、またゴールを目指すという方法にした。様々な技師の行為は、抜け落ちがない状態で、患者確認のゴールに向かうということである。この状況下では、技師が撮影をするとき、間違っている行為はなく、別の道筋も見付けられなかった。

4) タスク分析の結果、技師の行為が101、確認の行為が20ある中で、撮影にかかわる患者確認の行為は「患者に名乗ってもらう」という一つしかなかった。この行為が重要であり、怠ると患者誤認につながるということが分かった。

【結語】

外来一般撮影の技師の様々な行為の中で、撮影にかかわる患者確認の行為について、間違っている所や、別の方法があるのかを知りたいと思い、検討を行った。

検討の結果、必ず技師が、本人に名乗ってもらうという患者確認を行う必要があると分かった。また、この行為を怠ると患者誤認につながる可能性が高かった。

今後の展望として、以下の3点が挙げられる。

当院の現在のシステムでは、本人に名乗ってもらう患者確認が非常に重要であると明らかになったので、この重要性を伝えていくべきである。新システムに変更があった際には、現行の階層タスクを生かしながらの付け替えが可能である。今回のゴールは「患者確認」であったので、プロセス以外の患者確認の方法が見付けられなかった。別のゴールを目指すことで、別の患者確認の方法を見付けていきたい。